

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

社 会 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

社会科学の分野において最近とくに目につく流行語は、なんといってもグローバル化（地球化、グローバリゼーション、グローバリゼーション、globalization）である。グローバル化は、言葉の上ではこれまでも使われていた国際化や近代化と、変わったところはないように思われるかもしれない。しかし、第二次大戦後の世界においては、1960年代と1970年代の間には大きな違いがあるように思われる。それは何かというと、簡潔に要約すれば、1960年代では世界は統合に向かってだったが、1970年代には、統合ばかりではなく、統合への反発も世界的な潮流となったことである。反統合的な動きが1960年代には実際にほとんど存在しなかつたのか、あるいは、存在したにもかかわらず、意識されなかつただけであるかは、分かりにくい。しかし、戦後のこの二つの時期の違いを知ることは単なる言葉上の違いではなしに、近代化、国際化、グローバル化の実際上の違いを知ることにもなり、ひいては、現在の私たち自身の位置づけをする上でも、大きな意味があろう。以下は、この二つの時期を、まずマクロの視点から、次にはミクロの視点から、比較しようとするものである。

比較の目的のために、まず初めに行うべき作業は、この二つの時期を通じての共通点を知っておくことである。違いを論ずる前には、共通点を押さえておく必要がある。そこでまず、グローバル化に関して、この二つの時期に共通の戦後の時代の特徴を捉えておこう。その特徴とは統合である。それまでは結びつくことのなかつた世界各地の社会現象が、密接な関連を持ち始めることである。この社会現象に対して、積極的な理論的根拠を与えようとする試みが行われた。なかでもW.W.ロストウは経済成長の解明という立場から、一種の文化進化論を提唱した。世界各地の伝統社会は、世界先進勢力の経済圏拡大に対応するために、近代化に向かって離陸しようとする。この離陸に対する態度は決して一様ではなく、それぞれの社会の伝統や国民性を反映している。しかしいったん離陸してしまえば、経済は、西洋をモデルとした高度大衆消費時代へと前進する。離陸時には経済は、比較的狭い範囲の産業と技術に絞られているが、いったん離陸に成功すると、離陸に力を与えた最初の産業を乗り越えて、より高度な分野へと複雑に発展し成熟する。

このロストウの論から、経済のグローバル化を世界の経済的な統合とする解釈を導き出すことは、難しいことではない。ロストウ自身は非常に用心深く論を展開し、また彼の『経済成長の諸段階』の翻訳者の一人である木村健康も言うように、この著作にあつては、社会発展の多元的な決定因が強調されている。しかしながら、低開発国が先進国を経済成長のモデルとすること、成熟した各国の経済が、モデルとなった先進国の経済と結びつこうとすること、等を考慮すれば、世界は多様な伝統社会の併存から、西洋をモデルとする近代へと統一的に進化すると考えることは、むしろ論理的である。

このロストウの文化進化論は、出版され翻訳された1960年代には世界的な支持を得た。そのうえ1970年代に入っても、世界はますます一体化を促進している。統合という面のの

み注目すれば、世界の諸国は一体となって、ついには世界共同体へと、進化を遂げようとしているかに見える。具体的な例を挙げてみよう。T・D・トゥルンは観光産業を例にとつて、マクロの立場から、戦後世界の経済統合について論じている。観光産業のグローバル化とは、単に観光地が国境をこえて旅行者を引きつけるということだけではない。それは究極的には、第三世界の開発途上国を世界システム内に統合しようという、大きな流れの一部としてあらわれる。このような、観光産業のグローバル化をトゥルンもまた、第二次世界大戦後、1960年代までの形成期と、1970年代以降の発展期とに分けて考える。同じ統合ではあっても、統合の内容に構造的な違いがある。形成期には、民間の航空機輸送が一般的となり、また同時に行われたコンピューター・テクノロジーの急激な開発によって、世界各地の航空機輸送が効率的に結びつけられた。飛行機の予約のための多国間のデータの集積、航空便と世界各地のホテル、船便その他の輸送手段との連結、レンタカーの予約をリンクさせた効率のよい統一システムは、コンピューター・テクノロジーの開発によってはじめて可能となったばかりでなく、コンピューターの技術開発に伴って、急激に発展拡大した。

1970年代以降の発展期には、形成期にすでに行われていたコンピューターによる世界輸送のシステム化がさらに進み、世界産業の構造的な変化をも引き起こすようになった。航空会社、ホテル業者、旅行業者が一体となって、地域の観光産業を、世界経済に直接結びつけたのである。このように、1970年代の観光産業のグローバル化は、先進国の企業が発展途上国の観光地に資本を投下する、という構図を特徴とする。現地の業者は、外からの資本の提供者である、先進国の銀行や投資家、あるいは、国際的な大手の航空会社、ホテル業者、旅行業者の下に組み込まれた形で、労働力や資材を提供することになる。しかも、このような形で提供されるサービスの享受者は、主に先進国の消費者である。観光客は、外国の先進国からやってくる。つまり、観光産業の主な担い手は、売り手も買い手も、実はともに先進国であり、現地は労働と資材を提供するにすぎない。観光産業ばかりではなく、先進国の企業のなかで、似たようなプロセスを経て国際企業、多国籍企業にまで成長するものは、今日では数多く見られる。世界市場の形成、原材料や労働力の世界規模での提供が、企業をボーダーレスにするのである。

1970年以降のグローバル化の進展は、たとえばインドネシアの場合にもよくあらわれている。山下晋司によれば、

1969年には、ツバンにングラー・ライ国際空港が開港し、これによってバリ観光もジェット機によるマス・ツーリズムの時代を迎える。バリ州政府観光局の統計によると、1969年にバリを訪れた外国人観光客は11,278人で、以後この数字は年々増え続け、1989年に436,538人に達している。因みに、昨年1991年の「インドネシア観光年」(Visit Indonesia Year1991)には、全体として250万人の外国人観光客が見込まれ、そのうち約80万人の観光客がバリを訪れると試算されていた。

しかし、このような観光産業の振興に伴って、文化的には望ましくない外国人ヒッピーの増加や、ドラッグの問題などが生じた。

観光によるこのような悪影響への配慮から、インドネシア政府は 1980 年代のヌサ・ドゥア地区の大規模な観光開発に際し、住民社会と観光客を分離する方式をとり、高級リゾート化によるエリート・ツーリズムを志向した。つまり、そこでは国際的水準を満たした快適なホテルこそが今日の「楽園」を演出する小宇宙となる。

このようなグローバル化の状況の下では、同業種の多国籍企業が国際競争力を確保するために、他の国際企業との提携を行う場合がある。これももちろんのこと、世界の統合を進展させる。樋渡由美の論ずるところによれば、国際提携によってもっとも有利となることの一つは、競争する企業同士が提携関係に入ることによって、競争の関係や基本的な条件をみずから作り出すことができるという点にある。あわせて、経済の規模を確保することによって、小規模の同業者には行い得ない大事業を行いうること、競争相手のノウハウを獲得できること、リスクを分散できること、等が挙げられる。樋渡は典型的な事例として、日米の自動車「摩擦」の例を挙げている。この場合には、日本側では日本産自動車の輸出自主規制やアメリカでの現地生産となってあられ、またアメリカ側では、日本企業の優れた点を積極的に導入しようとして、工程設計、生産管理、労働管理の広い分野にわたって、技術提携や合併事業を押し進めた。結果として、日米の自動車メーカーの間にさまざまな提携関係が積み重ねられてゆくにつれて、両者の生産・販売の基盤が共通になった。「摩擦」は民間の努力によって回避されたと考えることもできる。

このような考えの延長上にあらわれる仮説は、企業同士の国際提携が成功する場合には、国家の介入は少なくてよいというものである。さらに、たとえば、貿易の相手国が輸入規制を課す場合には、相手国内の提携相手を経由すれば、このような規制を迂回することもできる。つまりこのような状況下では政府の役割というものが問い直されている、とさえ考えられるのではないだろうか。これが、樋渡の論点である。次に挙げる井上順孝の言葉は、この論点をさらに明快に突いている。「グローバル化というのは、本来的に国家という枠組みに挑戦する側面をもっている。その意味では国家にとって危険なプロセスといってもいいだろう。グローバル化がボーダーレス化として理解されるときは、国境を無視するがごとき経済活動や人の動きが想定されている。」

グローバル化がボーダーレス化を意味する場合、そこではあらためて国家の役割が問い直されることになる。それが明確な問題性を帯びて立ちあらわれる分野に、出入国管理がある。労働市場の世界的な拡大に伴って、国際的な人的資源の流動が問題となる。簡単に言えば、国際的な出稼ぎである。日本では、労働力不足が言われた 1980 年代には、建設

業などを中心に外国人男性労働者が流入した。しかし日本では、良くも悪くも、労働力輸入の先進国であるイギリスやドイツのような問題が生じないように、言ってみれば、日本的な努力がなされた。イギリスやドイツの問題とは、輸入された労働力が長期的に定着したことによって、外国人の貧困層が生じたことである。しかも、この階層にはイスラムが宗教と文化の両面で持ち込まれているために、よけいに他の階層と乖離し、イギリスやドイツの内部に特殊な社会を形成している。

これに対して、日本では、不足する労働力を補ったのは、まず第一にロボットである。自動車工場の現場で活躍するロボットは有名であるが、自動販売機のようなものまで含めれば、世界のロボットの95%までが日本に集中している。自動販売機や、簡単な電子頭脳で作動する機械などを除外した場合にも、約75%が日本で「働いて」いると推定されている。ロボットに続いての第二が日本人女性労働力であるが、このどちらでも補いきれない建設現場のような労働に、外国人男性労働者が「輸入」されたのである。このような状況は、人種問題や人権ともからんで、倫理的でデリケートな問題を含んでいる。これもまた、グローバル化の一面である。

しかし、日本では、1990年代初頭には、労働力不足から雇用不足へと転じた状況を受けて、外国人移民に関する法律が手直しされ、引き締められた。法律が改訂されるに伴って、政府は積極的に外国人労働者の締め出しを行い始める。この日本の例をとれば、労働力の調整はすでにグローバル化されており、それに対して政府が時に応じて、必要と考えられる介入を行っていることが分かる。それは日本を、地球規模での労働市場の一地域として、実践的に位置づけるという結果を生むことになる。

このように、グローバル化では、世界の一体化ばかりが強調されがちである。それは、「小さくなった地球」というような表現にも日常的にあらわれる。しかし、そうであろうか。グローバル化について最も積極的に発言している社会学者の一人であるA.ギデンスは、グローバル化とは、統合と拡散とが同時に現れる複雑な社会過程であることを強調する。たとえば、以上に述べてきたような世界統合の必然の結果として予想される世界共同体は、いまだに出現していない。世界統合は、世界各地で地域社会の構造変化をもたらし、新しい階層の出現や階層間の再統合を出現させている。これは、統合も生み出すかもしれないが、多様化をも生じさせる。しかも地域によっては、同じ原因が同じ結果を生むとは限らない。これもまた、多様化を生み出す結果となるだろう。さらに現状ではさまざまな文化的事象が、相互の関連もなく世界中にばらまかれる。ファッションや音楽、映画はその代表的なものである。それらによって運ばれる異文化の断片は、だれでも享受できるものである。旅行者や外国人労働者、国際企業は、メディアの情報を現実に背負ったサンプルとさえなる。

このようにスクランブルされた世界を、井上順孝はさらに次のように表現する。「いま流行のインターネットを介した情報交換などは、まさにグローバル化の典型であり、そこには一種のアナーキーすら漂っている。便利さとともに、ある種の不安が同居しているのはグローバル化が国家や民族などとは別の、何か得体の知れない文化の座標軸を作りつつあるからである。」世界の一体化、あるいは世界の一方向への進化、という意味でのグローバル化から、井上の言うような意味でのグローバル化へと進んだのは、やはり1970年代以降と考えてよいのではないだろうか。

このような意味でのグローバル化に対する最も先端的な仮説は、*reflexive modernity* である。日本語ではまだ、訳語さえ定着していない状態ではあるが、一応ここでは、再帰的近代としておこう。世界はロストウの理論から導き出される、西洋をモデルとした資本主義社会の形成を終わり、その反省期に入っているというのが、この仮説の論点である。U・ベックによれば、新しい近代とは、「産業社会という時代の完全な終焉に向かう、創造的な（自己）破壊の可能性」を言うのであって、それは新しい近代の到来を意味する。ベックの言うところの創造的破壊を、A・ギデンスは、次のように述べる。「グローバル化はまず地域の行為のコンテクストを破壊するが、つぎにはかならずそこに含まれる秩序を再帰的に再建する。しかも、この秩序はあらためて今度は反グローバル化として作用する。」簡単に言い替えれば、グローバル化によってまず破壊されるのは、地域社会の古い秩序である。地域社会の成員は、失われた秩序を再建しようとするが、再建された秩序はもともとの秩序とはまったく同じものではない。もともとの秩序と再建された秩序の差異は、地域により様々であろうが、それにもかかわらず、再建された秩序はまたあらためてグローバル化に対する抵抗として作用する。つまり、ギデンスによれば、グローバル化とは、地域社会の破壊という作用と、地域社会の再建という反作用とを同時に含んだ過程である。別の言い方をすれば、広い意味でのグローバル化とは、統合という狭い意味でのグローバル化と、統合への反作用である反グローバル化の、両方を含んだ過程である。以下に事例を挙げてみよう。この例は、難しく言えば、ギデンスの言うところの、「地域の行為のコンテクスト」に「含まれる秩序」の「再帰的」な「再建」の実例である。

関本照夫は、ジャワの影絵芝居ワヤン・クリットについて現地からの報告を発信しているが、これは、広い意味でのグローバル化の実例として読むことができる。人形師の一座は市場経済のなかで上演の収入によって暮らしている。結婚式などの家族的な儀式の場で上演するというのが、今も昔もいちばん普通の上演形式である。主催者は人形師とその歌手・楽団から成る一座を招き、謝礼としてお金を払う。大きな費用を伴う影絵芝居の上演はまれな出来事なので、地域一円の噂になり、多くの客が集まることになる。ジャワの行事では、多くの人々が参加することが主催者の誇りとなる。しかし、都市や平地の農民の、

人口密度が高く社会関係が流動的な状況では、招待状を配っても、その場にならないと参加者の数は分からない。ジャワの社会的コンテクストでは、たくさんの客がやってくるほど、また夜半過ぎまで多くの客が帰らずに残るほどよい。影絵芝居が客寄せにどれだけの効果があるかは一概には断定できないが、しかし、影絵芝居の上演が劇場のような純粋な芸術の鑑賞ではなく、社会的なコンテクストに埋め込まれたものであるという事実は重要である。

さてこのような状況に対して、近年影絵芝居用の音楽のカセットテープが流通するようになった。関本の理解する限りにおいては、1970年にはカセットは中部ジャワの農村では広く消費されていた。この頃には個々の家庭へのカセットの普及は限られたものであったが、カセット屋と呼ばれる商売人がどこにでもいた。村人は、儀式があると料金を払ってカセット屋を依頼する。

カセット屋は自転車や小型バイクに、たくさんのカセットテープが詰まった木箱、カセットデッキ、アンプ、ラウド・スピーカー、自動車用バッテリー（当時の村には電気は来ていなかった）を積んでやってくると、まず長い竿の先にスピーカーをとりつけ、家の屋根に達するほど高く立てる。そして機器をつなぎ、朝から翌朝まで絶え間なく音楽を鳴らしつづける。その大きな音は周囲の村にまで響きわたる。テープのなかには、ダンドゥット、クロンチョンその他、現代の歌謡曲もあれば、伝統的な楽器と様式による大衆歌謡、さらにはガムラン音楽や影絵芝居のものもある。いずれも録音されて町のカセット店で市販されているものである。カセット屋はこれらを適当に混ぜあわせて鳴らすのだが、一日のなかでも客が集まる正式の宴の時間には、ガムラン音楽か影絵芝居のテープがかならず選ばれた。

少々つけ加えると、

今日の影絵芝居の上演には、生演奏といってもマイクロフォン、アンプ、ラウド・スピーカーがかならず使われる。拡声装置は普通、カセット屋がもってくる安価で音の悪いものと変わらず、日本の学校の運動会のように歪んだ大音響がスピーカーから響く。だから音と響きという点では、カセットと生の上演の差は大きくない。

おもしろいことに、このような社会現象に対して、村人と都会人とは対照的な反応が見られる。村人は、たとえカセットであっても、影絵芝居の音楽が絶えず鳴り響くことが、儀式の場にはふさわしいものとして受け入れ、まったく違和感を感じない。しかし、都会の教養ある人々では、即座にこれを「伝統の破壊」として否定する者も多い。最近の田舎の暮らしの変化を身近に知らない者ほど、否定の反応は強いと関本は言う。

村人のあっけらかんとした歓迎ぶり、都会の人間の、ほとんど嫌な話を聞かされたとも言わんばかりの強い否定との対比は、極端なものだった。伝統における「真正なもの」と「まがいもの」とを区別し、後者を排して前者を守ろうとするほとんど自動的に定型化された意識、伝統が機械複製技術と結ばれることへの猜疑心、総じて伝統なるものを日常生活から離れたところで純粋に固定化された範型として対象化しようとする意識は、都市の、それも、文字によるものごとの対象化に慣れ親しんだ人々から始まって発展してきた近代インドネシア社会の産物である。

実際、村のレベルでも、カセットテープの普及は、伝統の影絵芝居に作用し、変化をもたらしめている。一方ではそれは、共同体のなかでの主催者と上演者の一体感を減少させた。しかし同時に他方では、まさにそのことによって伝統は、村レベルでは、近代的な「機械複製技術」を取り込みながら続いている。その結果として影絵芝居は、村では依然として村の慣習に埋没したままであり、その点ではインドネシアの教養人の愛好する、文字によって対象化され、範型として固定化された影絵芝居とは別物である。グローバル化の現状では、伝統もまた多様な仕方で再建されるといえよう。このように再建された伝統をギデンスは、「ポスト伝統」と名づけるのである。このような「ポスト伝統」の理解にとって重要なことは、伝統というものが過去の事実であろうとも、過去についての物語であろうとも、現時点においてどのように構築されているかを理解することにある。

都市の知識人にとって、「ポスト伝統」の影絵芝居はインドネシアの国民的な芸術である。だから文字に書かれ、語られる影絵芝居は、村の影絵芝居とは違って、インドネシアの国民的な財産である。伝統に対するこのような視点は、国家のアイデンティティーを伝統文化に求める点で、インドネシアを一つの国家として文化的に統合しようという試みと考えることができる。文字によって解釈され、あらためて位置づけられることによって、村はたんなる村という共同体から、影絵芝居を媒介として、インドネシアの村の一つとなるのである。このような国民文化の形成は、国家を超越した世界の一体化という意味でのグローバル化、つまり狭い意味でのグローバル化とは、相反する流れである。それは反グローバル化と考えることができる。

そのうえで、村におけるカセットテープの普及は、反グローバル化に抵抗する作用を含んでいるという点で、さらなるグローバル化と考えることもできる。都会の教養人の好む、国家主義的な、反グローバルな、インドネシアという地域に固有の真正な伝統、という考えとは、村のカセットテープは、真っ向から対立するものである。それにもかかわらず、真正な伝統を慣習から独立させ、範型として取り出そうとする仕方もまた、非西洋社会にあっては、西洋近代の模倣である。この現象は世界中に見られるものであり、グローバルな現象である。この意味ではインドネシアの国民文化もまた、一方では反グローバルでありながら、同時に他方では、世界の一体化の流れに合流している。この複雑な二面性をギデンスは強調するのである。

非西洋世界では、ジャワの知識人が、真正な伝統という観念によって、反グローバルなアイデンティティーを作り上げようとする動きに平行して、西洋世界のリーダー、アメリカでも根強い反グローバル化の主張がある。そのような傾向について、R・ロバートソンは、次のように述べている。

とりわけ、確信をもって言えることは、アメリカ合衆国では「反」グローバル化の感情がきわめて強いということです。共和党からは誰が大統領候補として適任かを決定する最近のキャンペーンにおいて鍵を握っていたのは、反グローバル化の感情でした。例えば、「反グローバリズム」という文句はアメリカの政治において重要なのです。またグローバル化というテーマに関する教育、すなわちいわゆる「国際教育」に反対する運動も実にたくさんあります。例えば、アメリカの子どもたちが外国について学習することに関して、アメリカ全土で教育委員会に反対する人々が常にいます。そうした人々は、古代ギリシャ哲学や日本宗教あるいはフランス哲学を学ぶと、心が破壊される、別のことばで言うならば、ものの見方・考え方が相対化されてしまうと恐れるのです。

ここで、この「相対化する」というタームは絶対的に重要です。 というのは、現代世界におけるほとんどすべての伝統は、ある意味で「相対化される」のではないかという脅威を自ら感じているからです。

ロバートソンによれば、反グローバル化とは伝統の相対化に対する抵抗である。しかし彼は、グローバル化のもとでいったん相対化された伝統が再び土着化することを、さらなるグローバル化とは言わずに、グローカル化（global と local の合成語）として観念化しようとする。この言葉自体はロバートソンの創作ではないが、彼はそれに積極的な新しい意味を与えている。彼の言うグローカル化とは、文化の普遍化、一般化という、狭い意味でのグローバル化の特徴と、文化の個別性、地域性の防御という反グローバル化の両方を含んだ概念である。それは、「個別的なものがあってこそ、普遍的なものはうまく機能する」という立場であり、もしも大きな意味でのグローバル化がこのあたりの事情を指し示しているとすれば、世界文明の可能性もありそうにさえ見える。このような見方からジャワの実例を考えれば、カセットテープの村の儀式での使用は、グローバル化が個別の村文化を支えていると考えることもできる。ロバートソンはこのあたりの事情を、グローカルという言葉によって、普遍的な文明が個別的な文化を保証する状態として説明するのであるが、世界の現状としては、これは今のところは倫理的な理想論であると思われる。都市の教養人は、村人とは逆に、伝統文化を文字によって相対化することに積極的である。グローカル化が理想であるか、現実であるかを判断するためには、なによりも現実の世界で実際に何が起きているかという、経験的な報告が必要であろう。それがあってはじめて、個々の具体的な事実の関係性を論ずることもでき、関係性の構造的な分析も可能になるのである。

以上に論じてきたように、グローバル化には、1960年代と1970年代の間に、構造的な差異が認められると考えてよいであろう。その差異とは、1960年代までには狭い意味でのグローバル化が、1970年代以降には広い意味でのグローバル化が進展したということである。それに伴って、1960年代には、多かれ少なかれ一定方向への文化的進化を意味した国際化や近代化という言葉は、1970年代の、広い意味でのグローバル化の複雑さのなかで、以前よりも意味が捉えにくくなっている。私たち自身の位置づけのためにも、まずこのグローバル化の複雑さと変容とを、マクロとミクロの二つのレベルから同時に観察しなければならぬ。そうしてはじめて、世界の現実を理解する可能性が開けてくるのである。

参考文献

安藤萬壽男・伊藤喜栄『現代世界の地域システム』大明堂、1996年

ベック、ウーリッヒ『危険社会』二期出版、1988年

GIDDENS, Anthony. *Beyond Right and left*. Stanford, Stanford University Press, 1994

樋渡由美「国際競争における企業と国家」(『レヴァリアサン』16号、所収)木鐸社、1995年春

井上順孝「グローバル化と向かい合う民族文化」(『グローバル化と民族文化』所収)國學院大學日本文化研究所、1997年

ロバートソン、ローランド「グローバル・トライアド」(『グローバル化と民族文化』所収)國學院大學日本文化研究所、1997年

ロストウ、W.W. 木村健康・久保まち子・村上泰亮訳『経済成長の諸段階』ダイヤモンド社、1961年(英文初版は1960年)

関本照夫・船曳建夫編『国民文化が生まれる時』リプロポート、1994年

トゥルン、タン・ダム 田中紀子・山下明子訳『売春一性労働の社会構造と国際経済』明石書店、1993年

山下晋司「国民過程のなかの民族文化」(『国立民族学博物館研究報告』3巻1号、所収)1992年

次の問題(1 - 40)には、それぞれ a , b , c , d の答えが与えてあります。各問題につき、a , b , c , d のなかから、最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a , b , c , d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

以下の問い(1 - 10)は、それぞれ二つの文章からなりたっている。資料に基づいて、著者の見解と一致するものを、次の a , b , c , d のなかから一つ選びなさい。

- a . (1), (2) とともに正しい。
- b . (1) は正しいが、(2) は誤りを含む。
- c . (1) は誤りを含むが、(2) は正しい。
- d . (1), (2) とともに誤りを含む。

1 .

- (1) 広い意味でのグローバル化、近代化、国際化は、それぞれ違う意味を含んでいる。
- (2) 狭い意味でのグローバル化とは、国際化の第二段階で、政府主導というよりは、NGO (非政府機構) が中心となっている状態を指す。

2 .

- (1) 1960 年代以前のグローバル化では、世界が西洋モデルにしたがって、一定方向に進むと考えられていたが、1970 年代以降のグローバル化では、スクランブルされた世界が出現している。
- (2) 1970 年代以降のグローバル化では、先進国と開発途上国の相互依存が構造化されているが、1960 年代以前のグローバル化においては、相互依存の構造化のための条件が整えられた。

3 .

- (1) T . D . トゥルンと樋渡由美に共通の論点は、国際的企業提携のグローバル化は、従来のような国家を中心とした国際関係理解を、無意味なものにしたという点に集約できる。
- (2) 樋渡は、産業のグローバル化が常に、政府間の関係に対立すると理解する点において、政府の役割が最も重要だとするトゥルンとは、見解が違っている。

4.

- (1) グローバル化が、「国家にとって危険なプロセス」である理由は、資本や労働のボーダレスな移動が促進され、国家の存在意義そのものが、問われるようになるからである。
- (2) グローバル化が、「国家にとって危険なプロセス」である理由は、その結果として、企業の役割と力とが国家を上回るようになるので、国内の治安が脅かされ、国家主権さえも危うくなりかねないためである。

5.

- (1) 労働の生産性は、日本人男性労働者が最も高く、次にはロボット、日本人女性労働者、外国人男性労働者という順で、低くなる。
- (2) 一般的に日本の企業においては、日本人男性以外は、景気の変動によって起こる、一時的な労働力不足を補うものとして、考えられている。

6.

- (1) 本論文の著者は、人類の健全な発展のためには、世界共同体のような最終目標に向かって、統合の努力に立ち戻るべきだと主張している。
- (2) 本論文の著者は、グローバル化こそが、これからの世界の倫理目標となるべきだと主張しているが、同時にその不可能性をも熟知している。

7.

- (1) 本論文の著者は、いわゆる事実に関する「客観的かつ中立的な」記述を行い、自分の主体的な解釈は、まったく取り入れていない。
- (2) 本論文の著者は、自分の主体的な解釈を大胆に打ち出そうとするあまり、実証性に対する関心を欠いている。

. 以下の問いについて、それぞれの設問に答えなさい。

8. 以下の文章のなかで、著者の見解として最も適切なものを選択せよ。

- a. グローバル化とは、国家レベルのみに観察される現象である。
- b. グローバル化とは、つまるところ文化現象にすぎない。
- c. 反グローバル化の究極的な意味は、伝統の相対化の否定である。
- d. 反グローバル化の究極的な意味は、創造的破壊である。

9. 1997年7月24日付の読売新聞によれば、世界のインターネットの90パーセントが、英語による通信であると報じられている。この報道に最も関連する事項を選択せよ。
- a. 広い意味でのグローバル化
 - b. 狭い意味でのグローバル化
 - c. グローカル化
 - d. 反グローバル化
10. この論文で著者が直接的に取り上げていないテーマは、どれか。
- a. 経済成長の諸段階の問題
 - b. グローバル化の影響力の問題
 - c. 世界経済の発展と国家の関係の問題
 - d. 近代化を担い推進する社会層の問題
11. W. W. ロストウによれば、ある社会が経済成長をするためには、何が不可欠か。
- a. その社会の主たる構成員がプロテスタントであること
 - b. その社会が主として儒教的価値観に支えられていること
 - c. 良質な労働力と外資の投入があること
 - d. その社会が外部の経済圏と接触すること
12. ロストウによって命じられた近代化に向けての「離陸」とは、何を意味しているのか。
- a. 工場へのマスプロダクションの方式の導入と経済構造の複雑化
 - b. コンピューターなどの先端技術の導入を伴う工業化
 - c. 伝統的な生産様式から不特定多数の買い手のための生産様式への移行
 - d. 農業や工業のような地域経済に立脚した産業構造からより国際化された産業構造への移行
13. ロストウの論ずる経済の「離陸」が1945年以降になったのは、どの国か。
- a. スウェーデン
 - b. 中国
 - c. 日本
 - d. ロシア

14. 「離陸」時の日本経済の原動力は何だったか。
- 繊維産業
 - ファッション産業
 - ハイテク産業
 - 自動車産業
15. ロストウの経済成長段階論への反証事例ないし例外事例として、最も説得力のある事例はどれか。
- 鎖国状態にあるブータンの経済の持続的な低迷
 - 近年のアジアにおける NIES のめざましい経済成長
 - ラテンアメリカ諸国の経済危機および債務危機
 - 貴金属などを先進諸国に輸出するザイールの低成長
16. 「西洋をモデルとする近代へと統一的に進化する」という記述に不適合な事例はどれか。
- インドネシアによる「国民車」の生産
 - マレーシアによるコンピューターの輸出
 - 日本による半導体の生産と輸出
 - 中国による絹の生産
17. 著者は「世界共同体」という表現を用いているが、著者の言う「世界共同体」の意味として最も適切なものはどれか。
- 「人類皆兄弟」といった、国境を越えた人類の連帯と友好によって結ばれる世界規模の友愛的共同体
 - 政治的には各国が主権を維持しつつも、資本、技術、労働力の自由な移動によって形成される世界規模の単一の経済圏
 - かつてのローマ帝国の支配にみられたように、支配的な民族や国家や文明による世界への覇権的支配
 - 国際連合のイニシャティヴの下に作り上げられる集権的な世界政府によって、統合され、統治される世界国家
18. T. D. トウルンの議論によると、1960年代に起こらなかったことはどれか。
- 先進国から発展途上国への観光旅行
 - 先進国と発展途上国を結ぶ交通手段の充実化
 - 先進国による発展途上国のサービス部門への集中的な資本投下
 - コンピューターによるホテル、交通手段、レンタカーなどの予約の効率化

19. トゥルンの論文の主たる目的は何か。
- a. 先進国が発展途上国を搾取している現実を指摘し、人道的見地から国際的な富の偏在や構造的矛盾を告発すること
 - b. 発展途上国における観光産業の発達、性産業の発達を伴うことがあり、倫理的に許容しがたいので、それを阻止すべきだという主張をすること
 - c. 国際的大資本は、観光産業にみられるように、ボーダーレス化しており、この動きについていけない企業は、世界経済上の生存競争に残れない現実を示唆すること
 - d. 発展途上国の産業の発展は世界経済と密接に関係しており、観光産業の分野ですら、もはや国内的要因のみでは理解不可能である事実を説明すること
20. 以下の事象のなかで、1960年代の出来事はどれか。
- a. 石橋内閣総辞職
 - b. アメリカのニクソン大統領の中国訪問
 - c. 朝鮮戦争勃発
 - d. キューバ・ミサイル危機
21. 以下の事象のなかで、1970年代の出来事はどれか。
- a. ベトナム和平の成立
 - b. ブラジル共和国の成立
 - c. ソヴィエト連邦による中華人民共和国の承認
 - d. 天安門事件の勃発
22. なぜ資本は国際的に移動するのか。その理由として適切でない答えはどれか。
- a. 発展途上国への投資が、その国の経済成長を助けるから
 - b. 安価な労働力を求めるから
 - c. 免税などの措置をとって積極的に国際資本を導入しようと試みるから
 - d. 市場に近いところで生産することが有利だから
23. 企業の国際提携の目的でかならずしも適切でないものはどれか。
- a. 生産と販売の基盤の共通化
 - b. 政府による規制の回避
 - c. 国際提携に参加する企業の利益拡大
 - d. 政府間での貿易摩擦の解決の促進

24. 樋渡の説明によれば、企業の国際提携の直接的結果として、何が起こるだろうか。最も適切な答えは次のどれか。
- a. 人、資本、モノの完全に自由な移動
 - b. 地球規模での寡占化
 - c. 支配権力による人民の搾取
 - d. 主権国家の消滅
25. 「労働力の調整」が「グローバル化されて」いるというのは、どのような意味か。
- a. 各国政府が協力して、労働力不足の地域に失業中の労働者を移動させること
 - b. 労働力が国境を越えて、需要のあるところに移動すること
 - c. 企業が、労働力が不足している地域に、被雇用者を移動させること
 - d. 地球全体でみた場合には、労働力の需要と供給が常にかならず釣り合っているということ
26. 資料でいわれている「広い意味でのグローバル化」の実例として、直接的に関係しないものは次のどれか。
- a. アニメ、カラオケなど、日本製の商品や遊びの世界への普及
 - b. エヴァンゲリオンの全国的流行
 - c. アメリカ社会の一部で最近みられる「国際教育」への抵抗意識
 - d. 恋愛結婚
27. 井上順孝の指摘する「一種のアナーキー」の意味として最も適切なものはどれか。
- a. ポルノなど有害な情報が法的規制を受けることなく世界に伝わる状態
 - b. 暴力や不法行為などに特徴づけられる無秩序の状態
 - c. 文化情報などが相互に何の関連もなく拡散していく状態
 - d. 政府の統治権力の正統性が保証されない無政府状態
28. U. ベックの reflexive modernity (再帰的近代) の概念の説明のなかで、「再建された秩序はもともとの秩序とはまったく同じものではない」と指摘されているが、なぜそうなのか。
- a. 秩序を再建する人々は、従来あった秩序を形成した人々とは異なっているから
 - b. 従来秩序は、近代化という点からみて、劣ったものだから
 - c. グローバル化に伴う技術や情報やライフスタイルの流入は、不可逆的な面をもつから
 - d. 一度崩れてしまったものを完全に再建するのは、不可能だから

29. 資料のなかでジャワの影絵芝居は、どのような実例を示すものとして言及されているのか。
- 文化面でのナショナリズムの実例
 - 狭い意味でのグローバル化の実例
 - 広い意味でのグローバル化の実例
 - 反グローバル化の実例
30. ジャワの影絵芝居のカセットテープの示す両面性と最も類似していると思われる現象は、次のどれか。
- マクドナルドとハンバーガー
 - カラオケとバー
 - CD と古典音楽
 - 野茂投手とドジャース
31. 近代化の特徴ないし属性として、かならずしも適切でないものはどれか。
- 産業化
 - 西洋化
 - 科学と科学技術の発展
 - 合理性への懐疑
32. 以下の書物のうち、伝統社会と近代化のテーマが、直接的には取り上げられていないものはどれか。
- マックス・ウェーバー 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
 - 福沢諭吉 『文明論之概略』
 - 島崎藤村 『夜明け前』
 - G . W . F . ヘーゲル 『法哲学』
33. 近代化によって日本の伝統文化の範型と見なされるようになったのは、次のどれか。
- 歌舞伎と相撲
 - 面と扇
 - 能と仕舞
 - 盆と正月

34. 民俗学者柳田國男は、村の伝統を知ろうとするならば、次の人に尋ねるのがよいと勧めた。どの人が。
- a. 村の高齢な一般の女性
 - b. 都会の男性
 - c. 高等教育を受けた文化人
 - d. 村の生活の新参者
35. 地理的にジャワから最も遠い都市はどれか。
- a. シドニー
 - b. ミュンヘン
 - c. ミルウォーキー
 - d. 札幌
36. 病原菌に汚染されていない安全な飲料水の確保は、開発の重要な指標である。1985 - 88年の時点で、安全な飲料水が国民全員に確保されていた国はどれか。
- a. サウジアラビア
 - b. チベット
 - c. インドネシア
 - d. エチオピア
37. 「多様性のなかの統一」というのはインドネシアの建国のモットーであるが、資料に使われている言葉でそれと同様のことを意味するのは、次のどれか。
- a. 広い意味でのグローバル化
 - b. 狭い意味でのグローバル化
 - c. 再帰的近代
 - d. グローカル化
38. 資料のなかで、伝統は相対化されつつも、再生産されていくという考え方が、示されているが、この考え方を、資料に使われている言葉で表現すれば、次のどれになるか。
- a. 反グローバル化
 - b. ポスト伝統
 - c. 段階的発展
 - d. 文化進化論

39. 今日、「原理主義」(ファンダメンタリズム)の台頭は世界規模の現象であるが、資料のグローバル化のコンテキストで解釈すると、最も適切なものは次のどれか。
- a. 伝統の相対化の積極的促進
 - b. 経済のボーダーレス化の積極的促進
 - c. 伝統の相対化に対する反発と抵抗
 - d. 経済のボーダーレス化に対する反発と抵抗
40. サルマン・ラシュディー『悪魔の詩』に対する「イスラム原理主義者」の反発の理由として、最も適切なものは次のどれか。
- a. シオニストによるイデオロギー化を放置できないから
 - b. 著者がインド人であり、異なった宗教圏・文化圏出身の人間だから
 - c. イスラム教の価値観が相対化されてしまうから
 - d. イスラム教に対する知識をまったくもたない若者がイスラム教を侮蔑したから